

研究課題名	ジャージー牛の特性を生かした自給飼料多給型の牛肉生産技術の開発		
予算区分	県 単 (2, 263千円)	担 当	育種改良G 生産性向上G
研究期間	継 続 (平成26～28年度)	協力関係	蒜山酪農農協
研究目的	<p>牛肉に対する消費者のニーズは多様で、中でも食味に優れた健康的な肉や安心安全の国産牛への要望が高くなっている。一方で、本県のブランドであるジャージー種は、粗飼料利用性に優れ、これまでの研究成果からその肉はうまみ成分として着目されているオレイン酸や、貧血改善に効果のあるヘム鉄などが豊富で、消費者ニーズにあった特徴を有しており、地域資源として販路拡大を図るためには、こうしたメリットを生かした飼育技術などの開発が求められている。</p> <p>そこで、ジャージー種の特性を発揮できる飼育技術として、イネWCSなどの自給飼料を多給した低コスト生産技術を開発し、消費者の嗜好にマッチした新たなブランド牛肉の創出を図る。</p>		
全体計画	<ol style="list-style-type: none"> 1 自給飼料多給型のジャージー牛肥育体系の現地実証 2 自給飼料多給により生産したジャージー牛肉のうまみ成分などを分析し、食味や健康機能などの特性を調査 3 実需者である消費者や飲食業者などと協働したPR、特産化の推進 		
研究対象	肉用牛	専門部門	飼養管理
<p>○ 本年度試験のねらい</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 自給飼料多給型のジャージー牛肥育体系の現地実証 蒜山酪農協と共同した現地実証。同農協の育成牧場のジャージー種去勢牛に対し、イネWCSを多給する肥育技術を検討。 2 実需者との意見交換等を通じて商品開発の方向を検討 <p>試験1 自給飼料多給型のジャージー牛肥育体系の現地実証（第1期） 〈試験の内容〉 蒜山酪農育成牧場で使用されているジャージー去勢肥育牛に対して、イネWCSを主体に肥育後期飼料と混合した発酵TMRを給与し、効果を調べる。</p> <p>試験2 自給飼料多給型のジャージー牛肥育体系の現地実証（第2期） 〈試験の内容〉 蒜山酪農育成牧場で使用されているジャージー去勢肥育牛に対して、イネWCSを主体に肥育後期飼料と分離給与する。特に、肥育中期の飼料組成を検討し、中期に赤肉率を向上させる給与方法を念頭に実証する。</p> <p>試験3 商品開発の方向の検討 〈試験の内容〉 消費者や飲食業者、流通業者などの実需者を交え、食肉生産について意見交換会を実施し、新たなブランド化の方向を踏まえて技術開発を進める。</p> <p>○ 前年度までの成果</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 イネWCSを多給した試験区では、19ヶ月齢の平均体重が513kgであり、慣行区と差がなかった。 2 血液性状について、同じく19ヶ月齢ではβ-カロチンについて、試験区は慣行区と比べ2.5倍程度高かったが、総コレステロール及び総タンパクについては差がなかった。 			

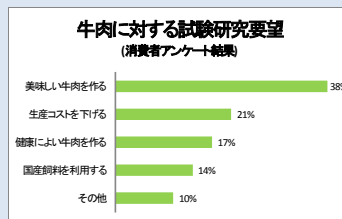
ジャージー牛の特性を生かした自給飼料多給型の牛肉生産技術の開発 (平成26年度～28年度)

背景



ジャージー牛肉の特徴

- ・日本一の頭数
- ・飼料利用性の良さ
- ・食味性に優れる
- ・濃い肉色、黄色い脂肪
- ・機能性(鉄分、ビタミン)が豊富



牛肉に対する消費者の嗜好の変化
(赤肉嗜好・健康嗜好味へのこだわり等)

地域資源を活用した新たなブランド牛肉の開発

実施内容

- (1) イネWCS等、地域で生産される自給飼料を多給したジャージー牛の肥育体系の実証試験
- (2) 自給飼料多給により生産した牛肉のうまみ成分などを分析し、食味や健康機能などの特性を調査
- (3) 実需者である消費者や飲食業者など共同した特産化の推進
- (4) 協力機関: 蒜山酪農農業協同組合
・育成牧場で現地実証試験を実施

成果の活用

- (1) 蒜山酪農協同組合による新たなブランド牛肉の商品化
- (2) ジャージー種雄子牛の利用途の拡大による酪農家の所得向上
- (3) 蒜山地域の新たな特産品の創出と活性化の推進